嫁取りディッター　前編
「とうとうこの日がやって来ましたね」
　ディッター当日、ダンケルフェルガーから指定があった競技場へ向かうと、ルーフェンが一見爽やかに見える暑苦しい笑顔でそう言ってきた。貴族院で宝盗りディッターができるのが楽しくてならないらしい。
「いや、まさか貴族院で嫁取りディッターが行われることになるとは思いませんでしたが」
　ちなみに、この嫁取りディッターはダンケルフェルガーにおいては時折行われているものらしい。男性側が求婚して女性の親に反対された時、花嫁を得るために親戚同士で行うディッターが嫁取りディッターなのだそうだ。
　婿側は負けた時に諦めるだけで特に賭けるものがないため、今回エーレンフェストが勝利した時の条件を付けたことに驚いたらしい。そんな風習はエーレンフェストにないので、何も得るものがないのにディッターなどしていられない。
　……しつこいダンケルフェルガー男子が諦めるというのは、確かに大事かもしれないけどね。
　ルーフェンが「ローゼマイン様にはぜひダンケルフェルガーへいらしていただきたいものです」と笑顔で言う。それを押し退けるようにして、ヒルシュールが不機嫌極まりないと一目でわかる顔でわたしを見下ろした。
　ヒルシュールはエーレンフェスト側の審判として、観客席のある上から審判をすることになっているらしい。ルーフェンは騎獣で競技場内を飛び回って審判をするそうだ。寮監として断れず、領地対抗戦を控えて研究熱が盛り上がっている時に研究室から引きずり出されることになったヒルシュールの機嫌は悪い。
「ローゼマイン様、わたくしの研究を邪魔しないでください、とお願いしたはずですが、どういうことでしょうか？」
「ダンケルフェルガーに申し込まれて断れない状況にされたのです。苦情はダンケルフェルガーへお願いします」
「すでに苦情は入れました」
　状況がわかっていても一言言わなければ気が済まなかったようだ。わたしとヴィルフリートは揃って「申し訳ございません」と謝罪しておく。
「やっとわたくしの研究環境が整ってきたのです。今、エーレンフェストに負けられるとわたくしが困ります」
　これは多分ヒルシュールなりの応援なのだろう。「……精一杯頑張ります」と答えるしかなかった。
　観客席をぐるりと見回せば、ダンケルフェルガーとエーレンフェストの学生達が総出で応援に来ている。観客席にいるダンケルフェルガーの数人が大きな魔術具を持っているのが見えた。わたしは兜こそ被っていないものの、騎士見習い達と同じように全身鎧で固めたハンネローレに問いかける。
「あの、ハンネローレ様。観客席の者がどうして魔術具を持っているのですか？　観客席からの参戦は禁止ですよね？」
「あれは戦いの様子をご覧になりたいとおっしゃったアウブが持たせた物で、ディッターの様子を収めるための魔術具です。戦いには何の支障もないので、お気になさらないでくださると嬉しいです」
　嫁取りディッターを観戦するために貴族院へ入りたいと言って、ルーフェンを困らせたらしい。この魔術具を使うことで、何とか我慢してもらったそうだ。
「このような魔術具を持たせるということは、アウブ・ダンケルフェルガーはハンネローレ様のお嫁入りがかかったこの勝負に乗り気なのですか？」
　レスティラウトの独走で、アウブが止めてくれるのではないかという希望を抱いていたのだが、ハンネローレは悲しそうに目を伏せた。
「一度決まった試合を取り下げるようなみっともないことはできぬ。何が何でも勝て！　だそうです」
「取り下げてくださるとこちらも大変ありがたかったのですけれど……」
　宝として賭けられている者は両方ともこのような勝負を望んでいないのに、儘ならないものである。
「では、行きましょう」
　ルーフェンを先頭に、騎獣に乗って騎士見習い達が競技場へ降りていく。ハンネローレと手を振って別れ、わたしも騎獣に乗りこむ。わたしの騎獣には魔術具や回復薬がたくさん入った箱が載せられているのだ。
「お兄様、お姉様。頑張ってくださいませ」
　シャルロッテの応援を受けて、わたしはシャルロッテの周囲を囲む低学年の騎士見習い達を見回した。今日は上級生の強い護衛騎士が全員ディッターに出場するので、どうしてもシャルロッテの周囲が不安だ。わたしはシャルロッテの周囲に控えているテオドールに声をかける。
「テオドール、シャルロッテを守ってくださいね。頼みましたよ」
「お任せくださいませ。私はここからローゼマイン様や姉上の御武運をお祈りいたします」
　シャルロッテ達の応援を背に受けながら、わたしは競技場のエーレンフェストの陣地に降り立った。選手全員が騎獣を一度消し、陣地に並ぶ。イージドールとブリュンヒルデがわたしの騎獣から箱を運び出したのを確認してから、わたしも一度騎獣を消して整列する。
　最前列には魔力が豊富な上級から中級の騎士見習い。マティアスもラウレンツもトラウゴットも最前列に並んでいる。その次の列には中級騎士見習いと共に全体の指示を出すレオノーレがいる。
　二列に並んだ騎士見習い達の後ろにいるのは、全身鎧ではなく、一部分を守るための簡易の鎧をつけた側仕えの二人だ。ちなみに、わたしも簡易鎧である。魔石で作る鎧なので、重さはないけれど、全身鎧は慣れていなければ動きにくい。段ボールで作った鎧が軽くても、色々なところに動きの制限があるのと同じ感じである。ただでさえ動きの遅いわたしがこれ以上遅くなることは避けなければならない。
　イージドールとブリュンヒルデの間には全身鎧でしっかり固めたヴィルフリートがいる。そして、一番後方にいるのが、今回の宝であるわたしとわたしの護衛をしつつ遠距離攻撃を行うユーディットだ。
　……開幕一番にわたしがシュツェーリアの盾を張れるかどうかが勝負の要。
　わたしはドキドキしながら打ち合わせた戦術を思い返す。
　開始の合図と共にゲッティルトで盾を出し、その盾に隠れるようにして祝詞を唱えてシュツェーリアの盾を完成させるように、とレオノーレに言われている。
　騎士見習い達の予想から風の盾を張らせないようにダンケルフェルガーの妨害があるのは確実だそうだ。けれど、開始時点では両者ともそれぞれの陣地にいて、陣地が離れているため、遠距離攻撃が来るに違いないらしい。
　そのため、エーレンフェストの騎士見習い達は全員がゲッティルトでダンケルフェルガーの攻撃を防いで詠唱時間を稼ぎ、ヴィルフリートとイージドールとブリュンヒルデの三人が広範囲のヴァッシェンをダンケルフェルガーの陣地に叩きこむことになっている。
　最初に広範囲魔術を補助する魔術具を使うイージドールは緊張した面持ちで腰のベルトに触れた。始めの合図があるまで、シュタープも魔術具も持っていてはならないのだ。
「両者、前へ！」
　ルーフェンの声にヴィルフリートが兜を小脇に抱えて、前に進み出る。ダンケルフェルガーの陣地からはレスティラウトが同じように兜を小脇に抱えて進んできた。
　そこで初めてわたしはダンケルフェルガーの陣地に目を向けた。視力を強化すれば、相手の陣地の様子もよく見える。ダンケルフェルガーの陣地にも大きな箱を足元に置いている者がいることに気付いた。魔術具や回復薬をたくさん持ち込んでいるようだ。全身鎧で固めた者ばかりなので、ダンケルフェルガーは全員が騎士だと思っていたが、もしかしたら武寄りの側仕えがいるのかもしれない。
　……考えることは同じってことかな？　それとも、向こうにとってはこれが普通の嫁取りディッターなのかな？
　こちらと同じように領地の者から助言や協力があった可能性は高い。
　……大丈夫かな？
　緊張に小さく体が震える。ダンケルフェルガーにはディッター物語が渡っているので、フェルディナンドの戦術がいくつか流出している。過去に戦った騎士達からの助言があれば、こちらの狙いがいくつも漏れている可能性もある。
　絶対に負けるな、とハルトムートを毎日のように送り込み、神具を貸し出してくれた養父様からの全面的なバックアップはもちろん、おじい様やお父様からも色々な戦術に関する助言があった。負けるわけにはいかない。
　ルーフェンを中心に、ヴィルフリートとレスティラウトの二人が向かい合った。
　レスティラウトとヴィルフリートが睨み合う前でルーフェンがシュタープを出した。ヴィルフリートとレスティラウトもシュタープを出して前に差し出し、ルーフェンの動きに合わせて上へ高く上げていく。
「正々堂々と戦おうではないか」
「我々もアウブより何が何でもローゼマインを守れ、と言われています。負けません」
　言葉をかけ合い、お互いに背を向けると陣地に戻っていく。ルーフェンはシュタープを上げたままだ。
　陣地に戻った二人が兜を被った。それを確認したルーフェンがシュタープを青く光らせると、ブンと大きく振り下ろした。
「始め！」
「ゲッティルト！」
　エーレンフェストの騎士見習い達がシュタープを出して、一斉に盾を構える。わたしも同じようにゲッティルトで円い盾を出し、その陰で祝詞を唱え始める。
「守りを司る風の女神シュツェーリアよ」
　祝詞を唱え始めたわたしの前でイージドールが腰に下げていた魔術具を一度強く握って、空高く投げ上げる。空中にいくつもの魔法陣が描き出される。ハルトムートが作った広範囲魔術の補助具だ。元々はクラリッサの研究だった魔術具である。
「側に仕える眷属たる十二の女神よ」
　空中に魔法陣が展開されたのを見たヴィルフリート達三人がシュタープを高く掲げた瞬間、「ダンケルフェルガーが何かを投げたぞ！　全員構え！」というマティアスの声が上がった。
「我の祈りを聞き届け　聖なる力を与え給え」
　次の瞬間、ものすごい光がエーレンフェストの陣地を照らした。わたしは何人もの騎士見習い達の後ろにいたこと、そして、何よりも一人だけ飛びぬけて背が低いおかげで光はほとんど当たらず、祝詞を唱え続けることができた。けれど、最前列の騎士見習い達は完全に目が眩んだようで、「目が！　目が見えぬ！」と叫んでいる声がする。
「ヴァッシェン！」
　ヴィルフリート達も片腕で顔を庇うようにしながら呪文を唱えた。とりあえずダンケルフェルガーの陣地に向かって水が流れれば良いのだ。目が眩んで前がほとんど見えていなくてもできる。
　魔力量だけならばエーレンフェスト寮で上位に入るヴィルフリート、イージドール、ブリュンヒルデの三人がほぼ全力を叩きこんだヴァッシェンである。滝のような大量の水がダンケルフェルガーに向かって流れ込んでいった。
「うわあああぁぁぁ！」
「何だ、これは！？」
　エーレンフェストの目が眩んでいる間に攻撃を仕掛けようと騎獣を出していたダンケルフェルガーの騎士見習いや全力で攻撃しようと大きな剣を振り上げて魔力を溜めこんでいた騎士見習いが水龍のようにうねりながら襲い掛かって来る大量の水に押し流されてゴロゴロと転がって行く。
　これでハンネローレが陣地から押し流されていたら勝負は決まったのだが、残念ながら宝を守るために盾を構えた騎士見習い達によって陣地内で踏み止まっていたようだ。
　三人が大量の魔力を込めたヴァッシェンの威力は強いけれど、効果はほんの十秒程度のことだ。ヴァッシェンはその場を綺麗に洗浄するだけで、跡形もなくなるので、水に濡れたマントが重いということもない。
　あまりの水の勢いに押し流され、呆気にとられていたダンケルフェルガーの騎士見習い達が「急いで戻れ！」と命令されて態勢を整えるまでに更に十秒もかからない。合計で二十秒ほどの時間稼ぎだが、わたしがシュツェーリアの盾を完成させるには十分な時間だ。
「害意持つものを近付けぬ　風の盾を　我が手に！」
　キンと硬質な音がして、半球状のシュツェーリアの盾が完成する。同時に、シュツェーリアの盾から黄色の光の柱が立ち上がった。
「うぇっ！？」
　光の柱は貴族院で儀式を行った時にはよく起こる現象だが、これまで盾を作った時にはなかったので、ものすごく驚いた。驚きつつ、光の柱を見上げる。そういえば、普段は指輪に魔力を込めてシュツェーリアの盾を作っている。シュタープをゲッティルトで変化させた盾を作ってから祈りの言葉を唱えたのが初めてだった。
「……ダンケルフェルガーが祝福を得られることから考えても、シュタープを使って儀式をしたり、祝詞を唱えたりするのが大事ってことかな？」
　わたしが光の柱を見上げながら呟いていると、レオノーレが目の眩んでいる騎士見習い達に盾の中に入るように指示しながら、わたしとユーディットを振り返った。
「ローゼマイン様、急いで海の儀式を！　ユーディット、時間を稼いで！　騎士達が使い物になりません」
　わたしは即座にシュタープをもう一つ出して、図書館で調べて特訓した海の女神フェアフューレメーアの杖を作り出す。シュタープを光らせ、海の女神フェアフューレメーアの記号を空中に書きながら「シュトレイトコルベン」と唱えるのだ。フリュートレーネの杖と混同しないために一手順必要なのである。
「海の女神フェアフューレメーアよ」
　わたしは覚えたばかりの海の女神フェアフューレメーアの祝詞を唱えながら、杖をゆっくりと振り回し始める。ダンケルフェルガーがこの試合のために与えられている祝福を神々に返すのだ。
　わたしが杖を出している間にユーディットが「行きます！」と声を上げ、騎獣に飛び乗った。回復薬を飲むために下がるヴィルフリート達三人と入れ替わるように、ユーディットの騎獣が駆け出していく。
「やぁっ！」
　ユーディットがスリングを使って、態勢を整えつつあるダンケルフェルガーの陣地に向かってソフトボールくらいの大きさの魔術具を飛ばす。
「何かが飛んで来るぞ！」
「叩き返せ！」
「駄目だ！　網で受け取れ！」
　爆発の可能性があることを示唆した騎士見習いがシュタープを変形させた網で飛んでくる魔術具を捕らえた。魔術具は網に触れた瞬間、爆散し、周囲にほのかに赤い煙幕のような煙と細かい粉塵を撒き散らす。
「ぎゃああぁぁぁ！　目が！」
「げほっ！　ごほっ！　喉が……」
「吸い込むな！　手足が痺れる」
　態勢を整えつつあったダンケルフェルガーの陣営で騎士見習い達がのたうち、もがき苦しむ状態になった。とても攻め込んで来られるような状態ではない。
「さすがハルトムート。ローゼマイン様の敵には容赦ありませんね」
　回復薬を飲んで魔力回復をしているブリュンヒルデが感心したようにそう言った。ハルトムートが採集地で騎士見習い達に採集させたネガローシという白と赤の斑の実をすり潰して粉末状にしていたものを爆散するための魔術具である。
　目に入ると涙が止まらず、鼻から吸い込むと鼻の奥が痛んで鼻水が出てきて、口から吸い込むと喉の奥がヒリヒリと痛み、人によっては熱が出たり、手足が痺れたりするらしい。ヴァッシェンで洗い流せば、目の痛みくらいは取れるはずだし、痛みがそれほど長引くこともないとハルトムートは言っていた。けれど、光で目をくらませただけのダンケルフェルガーに比べるとエーレンフェストの魔術具は悪辣この上ないと思う。
「くっ！　ローゼマインがとても聖女と思えぬような悪辣で卑怯な手を使うことなど、二年前からわかっていたことではないか。怯むな！　このような粉塵はヴァッシェンで洗い流せ」
　……わたしじゃなくて、ハルトムートが考えたんだけどな。
　そう思いながら、わたしは身体強化の魔術具に魔力を流しつつ、ぐるんぐるんと大きくフェアフューレメーアの杖を回す。杖の動きに合わせて、ざざん、ざざんと潮騒の音が聞こえ始めた。それに合わせてダンケルフェルガーの騎士見習い達の体から祝福が吸い取られ始めた。
　強制的に祝福を打ち切られるのだ。祝福に身体を慣らしていた騎士見習い達がつんのめるのが見える。ついでに、闘争心に燃えていたダンケルフェルガーの戦意を奪い取って心を穏やかにするのである。戦いの気分を盛り上げるまでに、またさらに時間がかかるだろう。
「ディッター勝負が終わっていないのに何をするのだ！？」
　ダンケルフェルガーの陣地でレスティラウトの叫ぶ声が聞こえる。けれど、これは元々暑さを和らげるための儀式で、ディッターの後でなければ行ってはならないという儀式というわけではない。
　……まぁ、真冬に行うことでもないけどね。
「我等に祝福をくださった神々へ　感謝の祈りと共に　魔力を奉納いたします」
　祝詞を唱え、高く空に向かってフェアフューレメーアの杖を掲げる。ドンと音を立てて光の柱が立ち、ずわっと皆から奪った祝福の魔力が空に向かって駆け上がっていった。ろくに戦う前から祝福を奪われたダンケルフェルガーの騎士見習い達は呆然としているけれど、これで少しは互角に近付くはずだ。
　もう一度ダンケルフェルガーの騎士見習い達が戦闘態勢に入る頃には、エーレンフェストの騎士見習い達の眩んでいた目も戻ったようで、皆が騎獣に乗って戦闘態勢に入っている。
「ローゼマイン様が祝福を消してくれたとはいえ、気を抜かないでください。ダンケルフェルガーにはラールタルクがいます。ラールタルクにはトラウゴットとラウレンツの二人で必ず対抗するように。いいですね」
　レオノーレの声に「はっ！」とラウレンツとトラウゴットの声がした。エーレンフェストの近距離戦では一、二を争う二人が、二人がかりで止めなければならない相手がダンケルフェルガーにはいるようだ。
　一瞬で蹴散らされた二年前に比べれば、エーレンフェストの騎士見習い達は連携も取れるようになっているし、魔力も増えていて強くなっている。それでも、ダンケルフェルガーは別格らしい。「最近は儀式で祝福を得るためにディッターが以前より盛んになっているくらいなので」とマティアスが言っていた。
　戦力的には将棋に例えるならば、人数の少ないエーレンフェストが普通に歩兵交じりで駒を揃えているのに、人数が多いダンケルフェルガーは歩兵以外の駒ばかりを選別する余裕がある状態だ。そのうえ、トラウゴットとラウレンツの二人がかりで止めなければならないのだから、ラールタルクは最初から飛車が裏返しになっているくらいに個人的技量に差があると言えるだろう。
「エーレンフェストの皆に武勇の神アングリーフの祝福を」
　わたしは指輪に魔力を込めて、アングリーフの祝福を贈る。少しでも互角に戦えるように、と思ってのことだが、立て続けに儀式を行ったので、わたしも魔力を回復させなければまずい状態になって来た。
　……これからヴィルフリート兄様がエーヴィリーベの剣を使うことになるから、わたしも盾を維持するために魔力がたくさん必要なんだよね。
　色々と試してみた結果、近くでエーヴィリーベの剣を使われるとシュツェーリアの盾の強度が弱まるのだ。神話的にシュツェーリアの盾よりエーヴィリーベの剣が強いらしい。わたしはダンケルフェルガーの盾対策もその辺りではないかと睨んでいる。
「ローゼマイン様は騎獣に乗りこんで、中で回復に専念してください。ヴィルフリート様は合図をしたらエーヴィリーベの剣を使えるようにご準備をお願いします。ブリュンヒルデ、イージドール。二人は魔力残量に気を付けながら、交代でユーディットに魔力の籠った魔術具を渡してください」
　レオノーレとマティアスによると、少しでも互角の勝負に持ち込むためには、ユーディットが遠距離攻撃をして、向こうの守りに人数を割かせることで攻めに出られる人数を減らすことが大事だそうだ。
「ラウレンツとトラウゴットがラールタルクに集中できるように、ナターリエやアレクシスは動いてください。マティアス、上は頼みます」
「はっ！」
　レオノーレの指示に騎士見習い達が陣を飛び出していく。エーレンフェストが動いたことに合わせてダンケルフェルガーも動き出す。
「祝福を奪われたところで、エーレンフェストの騎士見習いにダンケルフェルガーが負けるわけがない！　行け、ラールタルク！　エーレンフェストを蹴散らせ！」
「はっ！」
　レスティラウトの声と共にダンケルフェルガーの騎士見習い達が騎獣に乗って駆け出した。
　そこから先は騎士同士の戦いだ。わたしは優しさ入りの回復薬をレッサーバスの中で飲みながら、戦況を見つめる。
　レオノーレ達の予想通り、ユーディットが魔術具を投げることで守りに徹する人数をエーレンフェストより増やすことで、騎獣を駆って戦いに出ている人数を減らすことに成功していた。それでも、一人一人がエーレンフェストの上級騎士並みに強いダンケルフェルガーに対抗することを考えると、ギリギリだそうだ。
　……うわ、速い。
　祝福を奪ったはずなのに、ダンケルフェルガーの騎士見習い達の動きはエーレンフェストの騎士見習い達より少し速いように見える。
「祝福がなくなったところで、剣技自体がそれほど衰えるはずがなかろう！」
　剣を構えて斬りかかってくるラールタルクをラウレンツが必死に止めるのが見えた。
「ユーディットの魔術具を正面から受けて鼻水垂らしていたくせにカッコつけるな」
「だ、黙れ！　こちらの魔術具に目が眩んで動けなかったのは其方等ではないか！」
　上空の戦いは罵り合いの挑発合戦から始まった。
[------------------------------------------------]
嫁取りディッター　中編
「ラールタルクを押さえ込めるかどうかが勝負の分かれ目になる。押し負けるな」
　わたしのシュツェーリアの盾が完成し、ダンケルフェルガーの祝福を奪うことに成功した今、ダンケルフェルガーで最も強いラールタルクをトラウゴットとラウレンツの二人で抑え込めるかどうかが第二の山場になる。ダンケルフェルガーが陣地の守りに人数を割いている最初の内にどれだけ相手の戦力を削れるかでエーレンフェストの勝敗が決まるだろう、とマティアスが言っていた。
「はあぁぁぁぁ！」
　トラウゴットが気合の入った声を上げながら、ラールタルクに斬りかかっていく。短い間隔で剣戟の音が響き、激しい打ち込みを行っているのがわかった。ラウレンツはどちらかというとトラウゴットの補佐をしているような感じで立ち回っている。
「勢いだけは良いが、いつまでもつかな」
　とりあえずトラウゴットとラウレンツが必死に攻め込むのをラールタルクが危なげなく捌いているのはわかった。ラールタルクにはまだ余裕がありそうに見える。
「……最初から全力のようにも見えますけれど、トラウゴットは大丈夫なのでしょうか？」
　とにかく攻撃、ひたすら攻撃、周囲なんて見ていないという戦い方だったトラウゴットが成長していないように思えて、わたしはハラハラしてしまう。けれど、レオノーレは安心させるように笑った。
「ラールタルクは全力を出さずに抑えられる相手ではございませんし、最近のトラウゴットは周囲の言葉を聞くことができるようになっています。それに、トラウゴットの勢いが落ちて来たらマティアスが交代するので大丈夫ですよ」
　器用なマティアスは今あちらこちらの戦いに指示を出しつつ、弓矢で援護をしている。けれど、常にラールタルクに注意を払っていて、いつでもトラウゴットやラウレンツと交代できるようにしているらしい。
「わたくしも指示を出しつつ、援護に向かいます。ユーディット、敵陣への攻撃は頼みましたよ」
　指示を出し終えて、戦況を睨んでいたレオノーレはそう言って騎獣に飛び乗るとシュツェーリアの盾から飛び出して行った。
　レッサーバスから身を乗り出すようにして見上げてみるものの、上空の騎獣達は動きが速くてよく見えない。
　……どれが誰だろう？
　位置がくるくると入れ替わり、武器を交わしている音はするけれど、皆が兜を被ってるため、誰がどれなのかわからない。上で周囲を常に見回し、指示を出しているのがマティアスなのと、二人がかりで挑んでいるのがラウレンツとトラウゴットなのしかわからない。
　王族の前で中央騎士団が強度確認をしたせいだろうか、シュツェーリアの盾に向かって攻撃してくるダンケルフェルガーの騎士見習いがいない。完全に放置されている。どうやら騎士見習い達をある程度減らしてからこちらに向かってくるつもりなのだろう。
「ユーディット、次はこれだ」
　イージドールがハルトムートの作った魔術具に魔力を込め、それをユーディットに渡す。騎獣に乗ったユーディットがシュツェーリアの盾から出ると、スリングでそれを敵陣に向かって投げつける。
「やぁっ！」
　投げつけたユーディットが盾の中に戻って来る頃には、ダンケルフェルガーの陣地の方で爆発音が上がったり、叫び声が上がったりしている。ハルトムートの魔術具はかなり威力を発揮しているようだ。
「それにしても、よくこれだけの魔術具を作りましたね、ハルトムートは」
　わたしが一人用のレッサーバスの中から魔術具の詰まった箱を覗き込んでいると、魔力回復中のブリュンヒルデが小さく笑う。
「文官見習い達が調合室で動けなくなっていましたよ」
　ハルトムートが作っていた魔術具には色々な物があり、被害度によってレベルが分けられている。
　低レベルは、ダンケルフェルガーが放った目が眩むような閃光を放つ物や大きな炸裂音がするだけの物。それから、悪臭がしたり、ちょっと気持ちの悪い虫が降り注いだりするような物で、比較的肉体的被害は少ない。近くにいた者がしばらく視覚や聴覚が使い物にならなくなったり、虫の退治に時間がかかったりするだけだ。
　中レベルは、ダンケルフェルガーに投げ飛ばした涙や鼻水が止まらなくなる物や痺れ薬や眠り薬が粉末状で混入されている物だ。肉体的に被害が出るけれど、これは基本的に粉末なので、慣れてくればすぐにヴァッシェンで洗い流せるようになる。すぐにヴァッシェンできればよいけれど、完全に吸い込んだり、飲み込んだりすると被害はちょっと長続きすることになる。
　そして、高レベルはフェルディナンドの参考書でえげつない作戦の時に多用されていたらしいやや殺傷力が高めの爆発物である。爆発して石礫が飛び出したり、まるで花火のように多段階で爆発したりする物もあるらしい。盾がなければ大変なことになる魔術具である。
　イージドールが低レベルと中レベルを結構手当たり次第に渡しているので、爆発してみなければ何を投げたのかわたしにはわからない。でも、ダンケルフェルガーの陣地も何が飛んでくるのかわからなくて、皆が盾を構えながら戦々恐々としているのだけはよくわかった。
　……陣地に対する攻撃は今のところ問題ないみたい。
　そう判断した直後、ヴィルフリートの護衛騎士であるアレクシスが騎獣でシュツェーリアの盾の中に勢いよく飛び込んできた。
「癒しをください！」
「アレクシス！？」
　騎獣から転がり落ちるようにして降りたアレクシスが腕を押さえながら自分の背後を振り返る。つられてそちらを見ると、剣を振り上げた状態ですぐ後ろを追いかけてきていたダンケルフェルガーの騎士見習いが盾から噴き出した風でバッと勢いよく追い払われるところだった。
　盾に弾かれて姿勢を崩したダンケルフェルガーの騎士見習いだったが、この中に入れないことはわかっているようで、すぐに体勢を立て直して戦いの場へ飛んで行った。
　追手が背を向け、盾の中が安全であることを確認したせいか、アレクシスが安堵の息を吐きながら兜を脱ぐ。
「貴族院が始まった頃に手合わせした時に比べると、ダンケルフェルガーがずっと強くなっています。個々の技術が上がっていて、戦列が崩れるのは予想以上に早くなると思います」
「何！？」
　アレクシスは自分一人で抑えきれるだろうと思っていた相手にやられたらしい。今はレオノーレやマティアスが援護することで何とか戦列を保っているが、長くはもたないとアレクシスは感じたようだ。アレクシスの報告に主であるヴィルフリートがバッと顔を上げて戦いの場を見上げた。
　わたしも同じように上を見上げる。確かにエーレンフェストの動きに余裕がなくなってきているように見える。
「ダンケルフェルガーでは儀式で祝福を得られるようになるために寮内で何度もディッターを行っていると聞いています。訓練時間と真剣度が例年とは比べ物にならないのかもしれません」
　訓練の回数や真剣度に違いがあるのは、エーレンフェストではまだ騎士見習い達だけでは祝福を得られないのに対し、ダンケルフェルガーが儀式で安定して祝福を得られるようになっていることからもわかる。
「……エーレンフェストもかなり訓練していますが」
「相手はそれ以上に訓練していたということです。それに、ダンケルフェルガーは上級騎士が多いですけれど、エーレンフェストは中級騎士の方が多いですからね。魔力圧縮を頑張っているとはいえ、魔力量にどうしても差が出ます」
　魔力圧縮は基本的に自分が必死に行わなければならない。わたしが多段階の圧縮方法を教えたところで、本人次第なのだ。ダンケルフェルガーは常に領地でディッターを行っているし、技量によって領地対抗戦に出られるかどうかもわからない状態である。
　おじい様によって訓練が強化されたことでエーレンフェストの戦力の底上げはされているけれど、ダンケルフェルガーと比べると個人個人の必死さが違う。
「アレクシス、癒しを与えます。早く戻れるように」
　わたしは指輪のはまっている手を窓から出して、アレクシスに近付いてくるように言うと、ルングシュメールの癒しをかけた。緑の光に傷を癒されたアレクシスが回復薬を一気飲みして、新しい回復薬を腰の革ベルトに引っ掛ける。
「やられました！」
　今度はナターリエが飛び込んできた。アレクシスは表情を厳しくすると、飲み終わった瓶をブリュンヒルデに渡して、兜を被り、ナターリエと入れ替わるように騎獣に乗って飛び出していく。
「ナターリエ、こちらへ。ルングシュメールの癒しを」
「恐れ入ります、ローゼマイン様」
　ナターリエに癒しをかけていると、今度は二人の騎士見習いが盾に飛び込んできた。ダンケルフェルガーの守りに人数を割かせ、こちらの方が人数的に有利な状態で戦っているはずなのに回復を求める人数が増えてきている。回復に戻る者が増えると戦場の人数は拮抗し、エーレンフェストはすぐに不利になってしまう。
「戦況はどうなのですか？」
「良くはありません。私の代わりにマティアスが、彼の代わりにレオノーレが戦っています」
　戦場を見回して、指示を出す二人が攻撃に回らなければならない状況になっているらしい。
　……マティアスはトラウゴットやラウレンツの交代要員じゃなかった！？
　わたしは慌てて青いマント一つに二人がかりで戦っているエーレンフェストのマントを探す。最初から全力で戦っていたトラウゴットの動きが鈍っていて、今はラウレンツが前面に出てトラウゴットが補佐的な動きをしていた。
「トラウゴット、一度戻れ！」
　トラウゴットはすでに回復が必要な状態なのだろう。ラウレンツの声が響く。けれど、トラウゴットは「駄目だ！」と叫んだ。
「私は其方と二人でラールタルクを押さえることを命じられている。交代要員が来るか、別の命令があるまでここを離れられぬ。耐えるぞ！」
　自分がただ戦いたいからではなく、戦況を見て動けない、と判断したらしいトラウゴットの言葉にラウレンツが「おぅ！」と応じる。
　トラウゴットとラウレンツの連携は今のところ上手くいっているようだが、マティアスが怪我人の穴埋めをしている状態では、トラウゴットと入れ替わることもできない。二人に疲労が溜まってくれば、ラールタルクを抑えられる者がいなくなる。
　……最初に考えられてた戦い方が崩れてきてる。
　戦列が乱れてきている上に、わたしも魔力の回復途中で癒しを連続してかけているので、魔力が回復してこない。
　……困ったな。
　だが、今は騎士見習いが戦えるようにすることが大事だろう。
　ダンケルフェルガーにじりじりと押されているのを感じながらわたしが次々と戻って来る騎士見習い達に癒しをかけていると、レスティラウトの声が響いた。
「あちらの戦列が乱れている！　こちらの守りは良い！　今の内に一気にエーレンフェストを叩き潰せ！」
　今が勝機と見たのだろう。ダンケルフェルガーは陣地の守りを減らして、攻撃に転じてくる。ギリギリの人数になってきているエーレンフェストの騎士見習い達に耐えきれるわけがない。
「ローゼマイン、行っても良いと思うか？」
　ヴィルフリートがエーヴィリーベの剣が入っている箱へ深い緑の目を向ける。
「一度全員を回復させて、戦列を組み直す必要があろう。時間を稼ぐ」
「良いと思います。こちらは全力で補佐しますから、決して儀式を中断させないでくださいませ」
「うむ」
　ヴィルフリートがエーヴィリーベの剣を手にするのを視界の端に映しながら、わたしは盾の中にいる者達をぐるりと見回した。
「ブリュンヒルデ、ユーディットに付いてください。そして、二、三回連続で高レベルの魔術具を使ってください。これまで低レベルと中レベルの魔術具ばかりを受けている今ならばダンケルフェルガーに大きな被害を与えることができるでしょう。守りと回復に向かう者を増やせるかもしれません」
「かしこまりました」
　ブリュンヒルデが高レベルの魔術具を手に取ると、ユーディットのところへ向かった。ユーディットが緊張した面持ちで魔術具を手にして騎獣を駆っていく。
「やぁっ！」
　これまで陣を守っていた騎士見習い達が陣を飛び出した直後の手薄になった敵陣に向かってユーディットが魔術具を投げ飛ばす。
　これまでは音、光、粉末などで、それほど大きな被害はなかったところで油断していたのだろう。ドン！　と大きな爆発音と共に煙と炎が上がったことで、ハンネローレの悲鳴が上がった。陣を飛び立ったばかりの騎士見習い達ばかりではなく、エーレンフェストを押していた騎士見習い達が大慌てで振り返る。
「今までと被害が違う！　戻れ！　また来るぞ！」
　ユーディットが第二弾を投げ飛ばすのを見た騎士見習いの声が上がり、陣にいた者が盾を構えて防御の体勢を取る。直後に爆発と共に石の礫が飛び出した。
　悲鳴の上がる敵陣と、これまでとは規模の違う爆発に迷いの生じたダンケルフェルガーの騎士見習いを見たヴィルフリートがエーヴィリーベの剣を持って、シュツェーリアの盾を出て行った。
「回復した騎士は全員ヴィルフリート兄様の護衛に付いてください。儀式を中断させないように全力で守って」
「はっ！」
　シュツェーリアの盾の中ではエーヴィリーベの剣は使えない。中で発動させると、シュツェーリアの盾が消えてしまうのだ。
　エーヴィリーベの剣にはもう魔力を満たしているが、ライデンシャフトの槍が青い稲光をまとうのに満タン以上の魔力が必要だったように、エーヴィリーベの剣が神具としての威力を発揮するにはそれ以上の魔力が必要になる。
「イージドールは回収準備を」
「心得ています」
　エーヴィリーベの剣を使用すると、ほぼすべての魔力を使うことになり、その後動けなくなるのだ。使用するには回収係が必須になる。これはヴィルフリートの側仕えであり、男性であるイージドールの役目だ。ブリュンヒルデには任せられない。
「何かするつもりだ！　阻止しろ！」
「させません！」
　エーヴィリーベの剣に魔力を注いでいくヴィルフリートを守る騎士達が投げ網を投げたり、ハルトムートの魔術具を投げつけたりしながら、ヴィルフリートに近付く騎士見習いを牽制する。
　ヴィルフリートが握るエーヴィリーベの剣に変化が現れ始める。白の魔石でできていた刀身が白く光り始め、冷気をまとい始めた。どんどんと魔力を込めていくと、ゆらりとしていた冷気が次第に濃くなって行き、氷雪へ変化していく。
「再生と死を司る命の神　エーヴィリーベよ　側に仕える眷属たる十二の神よ」
　自分の胸の前で刃先が上を向くように真っ直ぐに剣を握ったヴィルフリートが軽く目を閉じて祈りの言葉を詠唱し始めた。ヴィルフリートの声が競技場に響き、神の名を聞いたダンケルフェルガーの騎士見習い達が顔色を変えてヴィルフリートの方へ殺到する。
「最後まで祈らせるな！」
「阻止しろ！」
　これまで切り結んでいた騎士見習いが突然方向転換をしたことに驚きつつも、エーレンフェストの騎士見習い達が必死に後を追った。
「守れ！」
「近付けるな！」
　ヴィルフリートの祈りを中断させようとダンケルフェルガーの騎士見習いから矢が降り注いでくる。周囲の騎士見習い達が必死で叩き落しているけれど、一つ二つはヴィルフリートに届いた。けれど、それはフェルディナンドのお守りによって弾き返され、矢を射た者に魔力の攻撃が返る。
「我の祈りを聞き届け　聖なる力を与え給え　我がゲドゥルリーヒを奪おうとする者より　ゲドゥルリーヒを守る力を我が手に」
　ヴィルフリートを中心に氷と雪の混じった風が吹き始める。エーヴィリーベの力を感じ、何が起こるのか、と警戒したダンケルフェルガーの騎士見習い達がやや距離を取ろうとする。
「御身に捧ぐは不屈の想い　最上の想いを賛美し　不撓(ふとう)の御加護を賜らん
　敵を寄せ付けぬ　御身が力を与え給え」
　カッとヴィルフリートが目を見開き、剣を構える。
「エーレンフェスト、戻れ！」
「はっ！」
　何が起こるのかわかっているエーレンフェストの騎士見習い達は即座にシュツェーリアの盾へ戻って来る。わたしは魔力をどんどん注いで盾を少し広げたけれど、維持をするので精いっぱいになってきた。
　シュツェーリアの盾とエーヴィリーベの剣を同時には使えない。近くでエーヴィリーベの剣を使われると、盾の維持に非常に魔力を消耗するのだ。
「たああああぁぁぁぁ！」
　ヴィルフリートが気合を入れて、エーヴィリーベの剣を横薙ぎに払う。それと同時に、雪と氷でできた冬の主の眷属達が二十匹ほど形を取った。同時に、ヴィルフリートがその場に崩れ落ちるように座り込んだ。
「うわっ！？　なんだ、これは！？」
「倒せ！　怯むな！　これは魔獣だ！」
　ダンケルフェルガーの騎士見習いに、陣に、冬の眷属が襲い掛かる。術者の魔力によって強さが変わる眷属である。一振りで魔力のほとんどを奪われる大技だ。
　盾の一番端で待機していたイージドールが飛び出してヴィルフリートを回収してすぐに盾に戻って来た。そして、ヴィルフリートに優しさ入りの回復薬を飲ませる。
「少しは……時間が稼げそうか？」
「えぇ。ヴィルフリート兄様のおかげで皆の回復ができそうです。ユーディット、回復したら準備をしてちょうだい。攻撃を畳みかけます」
　冬の眷属を倒せば、ダンケルフェルガーも一度回復のために陣へ戻るだろう。そこが狙い目だ。
「あちらが回復しているところに一番威力が高い物を連続で打ち込みます。できれば、あちらの回復薬を破壊できるような物が良いのですけれど」
　今、ダンケルフェルガーの回復薬は全身鎧の騎士がしっかりと守る箱の中に詰められているのだろうけれど、回復薬を使う者が増えれば、開けざるを得ない。そこに魔術具を投げ込んで、できれば回復薬を破壊したい。
「次は回復薬を狙うのか。確か、回復や補給を断つのが必要だ、と叔父上の資料にも載っていたな」
　箱に布で巻いたエーヴィリーベの剣を片付けながら、ヴィルフリートが「わかってはいるし、必要な作戦だが、悪辣と言われても当たり前だな」と呟く。
「えぇ。エーレンフェストはダンケルフェルガーに比べると攻撃力が明らかに劣ります。あちらの宝が魔獣ならば一気に片を付けるのですけれど、ハンネローレ様ですからね。長期戦でじりじりと戦力を削っていくのが一番無難でしょう。そのためには回復薬が邪魔です」
　去年のフェルディナンドとハイスヒッツェの戦いにおいて、宝であるハンネローレは自分から陣地を出ることはなかった。シュタープの光の帯が届く場所まで近付いて引っ張り出さなければ、自ら陣を出ることはないだろう。
「あと少しだ！　さっさと倒せ」
「順番に回復を始めろ！」
　ヴィルフリート一人の魔力で作り出した魔獣である。ダンケルフェルガーの騎士見習いが総出で倒せば、時間はかかるけれどそれほど苦労するわけでもない。冬の眷属を倒しながら、回復を始めている。
「ユーディット！」
　ブリュンヒルデから魔術具を受け取ったレオノーレとユーディットの二人が飛び出していき、連続して高レベルの魔術具を投げる。ダンケルフェルガーの陣の上で爆発し、回復中の者が悲鳴を上げた。
「うわあぁぁぁ！　回復薬がっ！」
「どれが無事だ！？」
「次が来たぞ！　盾を！　防げ！」
「先に箱を閉めろ！」
　ダンケルフェルガーの陣地が大変なことになっているのがわかる。レスティラウトが怒りの声を上げた。
「ローゼマイン、いくら何でもえげつないぞ！　卑劣にして性悪！　其方、それでも聖女か！？」
　わたしは聖女を名乗った覚えはないし、フェルディナンドの指南によると油断した方が悪いそうだ。油断したダンケルフェルガーか、そんな指南書を書いたフェルディナンドが悪い。つまり、わたしは悪くない。
「魔術具を飛ばす射手を狙うんだ。もう何も投げられぬように徹底的に狙え」
　これまでは基本的に盾の中にいて、ちょっとだけ盾から出ては大した肉体的被害のない魔術具を投げていたユーディットを狙うよりも他の騎士見習い達を狙う方を優先していたようだ。けれど、魔術具による被害が甚大になれば話は別だということだろう。
「あの射手は投げる時には必ず盾から出ている。シュツェーリアの盾に攻撃判定されるからに違いない。こちらへ攻撃する時には必ず盾から出てくる。その一瞬を逃すな！」
「はっ！」
　レスティラウトの声にユーディットがビクリと震える。レスティラウトは実際に戦いに出ているわけではなく、陣で戦況を見ていたせいだろうか。よく見ていると思う。その通りだ。
　レスティラウトが「それから、ローゼマインも狙え」と付け加える。
「最初から儀式を立て続けに行い、その後ずっと盾を張り、騎士見習い達が休憩している間も癒しの魔術をかけ続けてきたローゼマインの魔力はそれほど回復していないはずだ。回復する余裕を与えず、全員で一気に攻撃を仕掛けてあの盾を破るぞ。私はアレを使う」
　奉納式でも中央騎士団から大量の攻撃を受けた後、わたしが儀式の前に薬を飲んで回復していたことを例に出しながらレスティラウトがそう言った。
「ローゼマイン様、そうなのですか？」
　レオノーレの質問にわたしは頷いた。最初に立て続けに儀式を行い、回復しきる前に癒しを連続で行い、エーヴィリーベの剣に負けないように盾を維持するためにはかなり魔力を使った。そして、皆が攻撃に転じてから回復すればいいか、と自分の回復は後回しにして癒しを続けていた。
「盾と騎獣を維持するための魔力はまだ残っていますから、攻撃してくる人数が少なければ耐えられるでしょうけれど、ダンケルフェルガーの総攻撃になると心許ないですね」
　中央騎士団に盾の強度を調べられた時もかなり魔力を削られた。今日のダンケルフェルガーの戦いぶりを見ていると、騎士見習いだからといって油断はできない。
「ローゼマイン様の魔力が心許ないなんて……」
　シュツェーリアの盾の中にいる騎士見習い達が一斉に不安そうな顔になる。絶対安全圏がなくなるのが不安に思うのはわかるけれど、ダンケルフェルガーはシュツェーリアの盾もなく、個人個人の盾だけで防いでいるのだ。
「そのような顔をしなくても、皆でダンケルフェルガーの騎士見習いの数をできるだけ減らせば良かろう」
　ヴィルフリートが立ち上がってそう言った。
「私も其方等もローゼマインの癒しを受けて、すでに回復しているではないか。エーレンフェストの皆でローゼマインを守るのだ。ローゼマインの魔力が回復するまでの時間を稼げば良い。それほど難しいことではない。違うか？」
「はっ！」
　先程あっという間に押し切られて、戦列を崩されたばかりだ。ダンケルフェルガーの騎士見習いの数を減らすのが簡単なことでないのは誰にだってわかっているだろう。それでも、まるで難しいことではないように騎士見習い達が奮い立つ。
「守れ、エーレンフェストの聖女を！　シュツェーリアの盾にダンケルフェルガーを近付けるな！」